

100年以上前の美しいカラー広告 岩手の山奥で保存

東野真和 2024年7月7日 11時00分



保存されていた米屋や薬店などのカラー印刷の「引札」=2024年6月8日午前11時40分、岩手県大槌町の大勝院、東野真和撮影



100年以上前に広告として業者が得意先などに配った「引札(ひきふだ)」と呼ばれる紙の広告が、岩手県 大槌町の山間の寺「大勝院」に残っている。

大槌町内の米穀店、薬店、酒店などの広告で、大黒様や馬、正装した人などが鮮やかなカラーで描かれている。5店の引札6種類が計8枚あり、いずれも縦25センチ前後、横35センチ前後で現在のB4判に近い。

「加藤薬店」の引き札には「大正6年(1917年)」の曆も印刷されていて、100年以上前に印刷されたようだ。

檀家(だんか)が自宅の改築時に見つけ、寺に持ってきた。あまりに色鮮やかなので保存していたという。

今は過疎が進む大槌町も、江戸時代は南部藩の代官所になるなど、海産物の交易で栄え、大正時代も釜石に次ぐ陸中地方の中心地だった。一方で2度の 大津波 も襲った。

5店とも今はないが、「徳田米穀店」の子孫、徳田健治さんは「自宅で保存していたが、東日本大震災の津波で流された。山奥のお寺に残っていたなんて」と驚く。大勝院では、額装して展示することを検討している。

大阪成蹊大芸術学部の熊倉一紗・准教授(広告デザイン史)によると、「引札」とは商品の売り出しや開店披露を目的として配布された印刷物を意味する。また「広告」という言葉がまだなかった 江戸末期 から明治初期にかけては、広告活動全般を指す言葉だった。最も古いものは1683年の三井 越後屋 が日本橋駿河町に開店した際に配布した引札だという。

大槌町に残っていたのは「正月用引札」で、年末年始、主に大阪の2大印刷業者が「見本帖(ちょう)」を作って全国から注文を受け、カラー印刷した紙に、地元業者が商品名などを印刷したようだ。

熊倉准教授は「美術史 からも広告史からも見逃されてきたが、近年は見直され、各地の博物館などで展示されることもある。いま見ても美しい印刷技術と、当時の活発な商売の状況をうかがい知ることができる」と話している。(東野真和)

有料会員になると会員限定の有料記事もお読みいただけます。

[今すぐ登録\(1カ月間無料\)](#) [ログインする](#)

※無料期間中に解約した場合、料金はかかりません

この記事を書いた人

 **東野真和**
釜石支局長 | 震災復興・地方自治担当
震災復興、防災、地方自治、水産業

[フォロー](#)